

## 合歡の木



今年梅雨に入る前から雨続きで、野菜や茶などの出来が悪いらしい。梅なども成熟する前に黄色くなって落ちたものが散乱している。しかし植物もいろいろで雨好きのものも多く、庭の植木の多くは、葉がいつになく大きく繁って、庭一杯緑が溢れているといった感じになっている。

特に合歡の木が一際ゆったりと繁って、昨日あたりから、頭上に薄紅色の柔らかい刷毛のような花を被るよつに沢山付けている。春の芽吹きどきは、木によって早いものも遅いものもあるが、遅いことこの双壁はこの合歡と百日紅である。他の木は芽吹き終え、若葉をそよがせていても裸の枝のまま、引越して初めての春は枯れたのではと心配したものだったが、芽吹き始めるとさつさと葉を繁らせ去年より

一段と成長しているのである。

私の故郷である信州は寒いためか合歡の自生はない。諏訪高女と呼ばれていた母校の庭の池の対岸の植え込みの中に一本あった。それが木陰に大振りの優しい花をひっそりと咲かせていたのが妙に印象的で、私の憧れの花になっていた。

三人目の子供が保育園に通いだした頃、学習塾を開いていた私は、手狭な公団住宅を出て、戦時中に建てられたH自動車の一戸建ての古い社宅を借り、庭にプレハブの教室を建てた。百坪ほどの庭には、柿の木が五本、梅や梨の木もあって花壇や菜園を作ったり、犬や猫を飼ったりと団地では出来なかつたことを子供たちと一緒に楽しんだ。

庭木にも縁起があるらしく、占い好きの夫が買ってきた本には方角と植木の吉相は何々と書いてあるものがあつた。中でも記憶にあるのは南方に合歡の木はよいとあつたことである。私は勉強に通つていた子供たちにそのことを話したらしい。といつのは

五年生の男の子が、山から苗木を採って来て植えてくれたことがあったのだ。しかし折角の好意も虚しく何故か育たなくて、私にとって合歓は益々憧れの木となっていた。

昭和も終わりの頃のある日、神田のタキイの前を通ると植木鉢に四十センチほどの合歓が植えられて売っていた。根本の七、八センチくらいは三センチほどの太さで、一枝を残して切られていた。そうだ、これを買って鹿児島の庭に植えておこう、六年後に帰るころには結構育っているのではないだろうか。そう考えると私は早速三千円のその鉢を買って抱えて帰ったのだった。

一週間ほどして鹿児島へ向かった。その頃は年一回、家の点検と老人ホームに居た姑を見舞いに帰っていた。私は合歓の鉢を抱えたまま飛行機に乗ったが、親切なスチュワーデスが機の隅に預かってくれた。鹿児島空港からはいつも通りにレンタカーに乗り込む。そしてどうやらその鉢は無事わが家に到着したのだった。

さて、その合歓を家の真南に植えることにしたものの、無人の家のこと水道は出ない。傍らに井戸があるのだが釣瓶がないから汲むことも出来ない。この近所はみんなお留守であった。仕方なく植えるだけ植えて帰って来た。雨の降ることをひたすら願いつつ。

次回の帰省のとき、先ず一番に合歓の様子を見た。その木はちゃんと根付いていた。ほっとして宿舎のいこいの村いむた池への道中車窓から何気なく外を眺めていた。と、何とあちこちに合歓の大木があるではないか。この辺では合歓はいくらでも自生していたのだ。後生大事に抱えて来て植えたことが、とても滑稽に思えて一人笑いをしてしまつた。

その合歓が冒頭の合歓で、今や二メートル以上に育ち、大きな傘のように枝を拡げ、庭の主のように鷹揚に収まっている。品種が良いのだろうか、それは秋まで次々と咲き続けるのである。